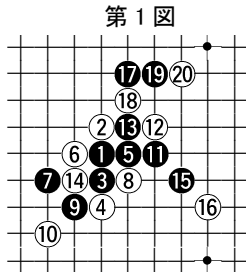


松月定石の一研究①

九段 河村典彦

松月は定石でも勝ち切るのは難しい。変化も多く、覚えきれないからである。しかし、一度その手順を勉強すると、実戦での応用が利く。かなり難しい研究になるが、並べるなどしてそのコツをつかんでほしい。なお、この研究は、かつて連珠世界に掲載されたものを再編したものである。

【第1図】では、まずはいきなり追い詰め問題から始めてみよう。実はこの局面、実戦で出た局面（連珠世界09年2月号の城西連珠会



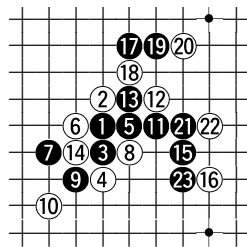
日記を参照）で、実は黒21から追い勝ちがあつたようだ。この追い詰めに解説してから順次遡って進めていきたい。

白10までの説明は省略するが、松月定石を打つた場合、一番高い確率でこの局面にはなる。途中、黒7で9にひいてはいけないなど、基礎知識はあるという前提で話は進めさせていただくことにする。

白10に対し、黒11が九州流と呼ばれる打ち方で、これでも黒勝ちである。しかし、いろいろな変化を知っていないととても勝ちきれない。白20までの変化などはその好例である。

黒21からの追い詰めに連続で出題したら、とても満点は出ないだろうというぐらい難しいので、変化を細かく解説していきたいと思う。

第2図



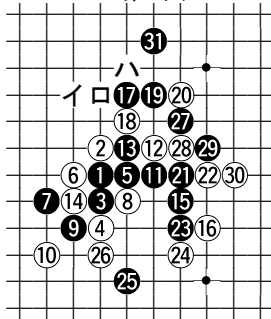
【第2図】追い詰めというからには追い手を打つ必要があるが、黒

21、23と引くのがまず第一歩となる。この三引きは実戦では形を決めるだけに打ちにくい。これに対しては白2通りしか止める場所はないが、どちらも黒にとつて厄介なのである。まずは下止めから見よう。

ところで、左にある7、9の連は今はずをつけない。白の防ぎによって打ち分けるのがうまい構想で、実際次で出てくる。

【第3図】ここでいきなり黒25！とトビ三を打つのが意表の一手である。この手の意味は後々わかってくる。

第3図



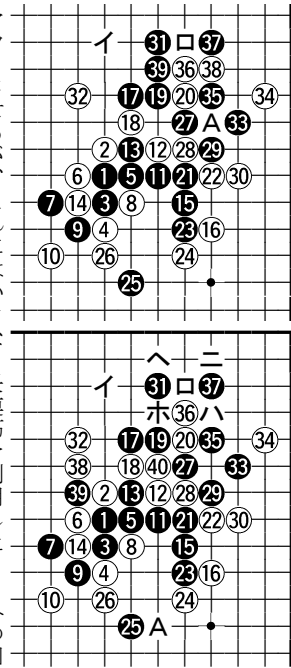
まあ普通は中止めなので白は26と止めるのだが、この交換をしてからおもむろに黒27、29と引き出すのが妙手順である。これには白も黒25と打たれている以上30から止めるのだから、この剣先が来れば黒31とイロハの含み

手を打ち、道が開けてくる。

【第4図、第5図】白32の止めが最強だが、黒33から引き出して黒37のミセ手がうまい。

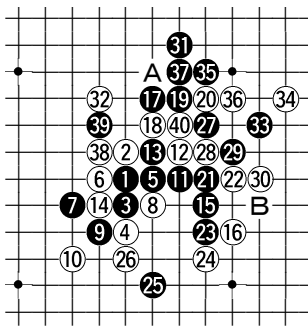
白38の止めには黒39と打つて以下イロ。白の四ノビは無効である。白38からは第5図のように打つ手がノリ手を利用した防ぎで、一瞬

第4図(上)、第5図(下)



ヒヤツとさせるが、これにはいきなり長連筋を利用したイクへの四追いがあるので大丈夫。

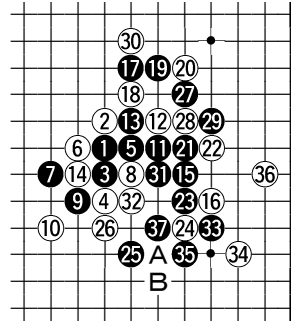
第6図



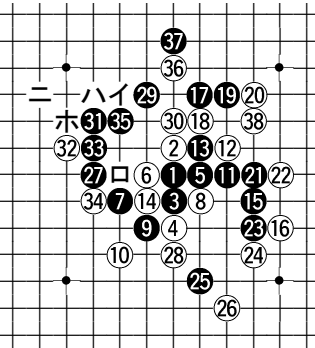
【第6図】ところで、黒35は次図のように攻めても勝ち（しかもつと早く）のように思えるが、黒37後Aと想った瞬間、白38の四ノビを打たれ、肝心のA点が四三々禁となってしまう。しかも白40でBの四三が残っており、詰連珠では落選である。この変化は出題者側がひそかに狙っている「罠」である。なので黒35からは前図のように打たなければならぬという訳である。

【第7図】では、次の変化に行こう。白30の反対止めである。白30と上から止められれば、当然下辺に向かう。ここからはさほど難しくない追い詰め、黒31から順次引いていけばいい。黒37後Aまで

第7図



【第8図】ということで、最初の黒25のトビ三に対し下から止める変化を説明しないといけない。



これに対しては剣先が2本使えるので実戦的にはいろいろ勝ちがありそうだ。一応黒29、31で勝っていてかつ詰連珠的にも最短とは思っているが、白の変化も多いので実は定かではない。白32の止めに黒33と引き、白34には黒35、37と打ち、白38と止めても以下イロハ二ホの四追いとなる。白34を反対なら、同じく黒35と引いて上下で勝つことができる。

ようやくこれで最初の三引きに対し、白24と下から止めた手に対しての追い勝ちが終了した。今度は上止めの変化だが、下止め以上

第8図

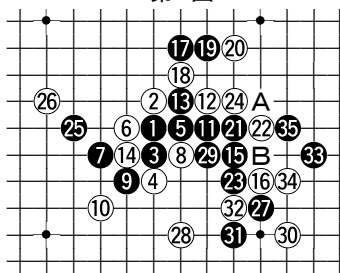
である。ここでよく見て欲しいのだが、後から25のトビ三を打つと、白にBと外止めされる。すると、黒35の時36がミセ手になっていない。白Bに止められた時は今度は上辺に向かうので、黒29の三引きを決める前に打っておく必要があったのである。（白30と止められた後で25のトビ三を打つと、白にBから外止めされてしまう）

にやっつかいな部分がある。ここまでまだ全体の半分である。

【第9図】白24の上止めに對しても、一見不可解に思える黒25の三引きが必要となる。これは、上に止めさせることにより黒27で含み手を打ちたいからである。そう、この27の含み手が強烈なのである。(27を29でも勝てる)

黒35まで打つて以下AまたはBというきれいな勝ちがある。実戦家としては白24の止めの時の主図をこちらにしたいのだが、詰連珠的には白26を反対止めの時の方が手数が多い。さらに先程と違つて白24に石が来て

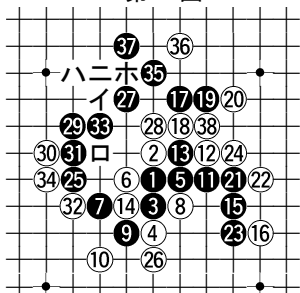
第9図



いるので黒の剣先の助けが得られず、もっと複雑になる。

【第10図】黒27からは、やはり黒27、29が筋のいい含み手になる。白30の止めはやむを得ないが、黒31と縦に引き、続いて黒33に引くのはほぼ第8図と同じ考えである。今回は白34と左から止めた時の勝ち方を示しておく。黒37が三になつているのが大きく、黒39からイロハニホのノリ切り勝ちとなる。盤端までまだ距離があるのが黒にとって大きなことである。また、白34を反対なら、左辺が広くこれ

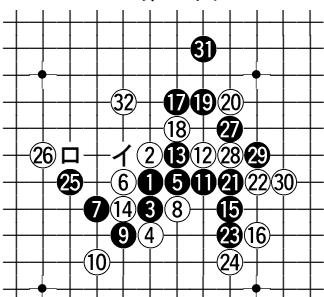
第10図



も勝てる。

【第11図】ところで、最初に戻つて、黒25とトビ三ではなく、図のように上辺に向かつて三を引く25ではダメなのかについて少し補足しておく。白26を下止めなら同じなのだが、26と止められた時少し違つてくる。同じように黒31まで進んだ時、白32の止めで、イロが残ってしまう。しかも、黒25は斜めの筋を長連筋にしており、まったく不要な石なのである。なので、最初にトビ三を「目立たぬように、こっそり」打つておくのが必要なのである。

第11図



こうしてみると、詰連珠の手順は美しい。最善を尽くすというのが結果的には美しい勝ち方になるのである。